

〈研究ノート〉

日本人学生のための日本語教育

——新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目の場合——

境 希 里 子*

Japanese Language Education for Japanese Students: A Case of Liberal Arts in the Shintoshin Campus

Kiriko Sakai

要 旨 日本人学生のための日本語の授業を行う大学が増えている。以前は、大学で改めて日本語を教えようという発想はほとんどなかった。母語であれば書いて当たり前、話せて当たり前という考えのもとに、レポートや論文の構成等について説明をする程度だった。しかし、大学全入時代を迎えた今、日本語力が十分でない学生もいる。自分の日本語に不安を感じ、学びなおしたいと思っている学生もいる。日本語そのものに集中させる授業も必要である。そこで、本学における日本人学生のための日本語教育のこれからを考える一助にもらうために、新都心キャンパスの総合教養科目「文章作法」、総合教養科目・夏期集中授業「役に立つ文章テクニク」、コラボレーション科目「文章作法 基礎の基礎」の3科目について紹介する。日本語の学習は、学年をこえて継続して行うことが望ましい。在学中の4年間（短期大学部は2年間）の目標を定め、その目標を達成するためには、どのような授業内容の科目をどの学年に設けるか。学部・学科、コースで必要とされる日本語の技能も反映させながら、本学の日本人学生にあった、本学独自の入学から卒業まで一貫したカリキュラムを考えるべきである。

キーワード 日本人学生 日本語教育 日本語表現

1. はじめに

「外国人留学生に日本語を教えている場合ではない」。外国人留学生の日本語教育に携わっている日本語教師が、日本人学生のための日本語の授業を受け持つことが多くなっている。筆者もその一人である。冒頭の言葉は、初回の授業を終えた日本語教師から、思わずもれる言葉だ。

筆者が、日本人学生の作文を初めて添削したのは、1996年度の総合教養科目・夏期集中授業「役に立つ文章テクニク」のときだった。添削する前は、漢字の間違いや文章の構成について指摘するくらいだろう、赤字を入れるところはほとんどないだろうと思っていた。しかし、そうではなかった。一文単位での添削が必要だった。そのときの日本人学生の文章力における具体的な問題点については、境（1998）にまとめた。夏期集中授業には、その後も毎年、2010年度をもって夏期集中授業自体が終了するまで参加した。きめ細かな添削が必要な状態は、最後まで変

* 本学准教授 日本語教育

わらなかった。

大学全入時代を迎えた今、日本語力が十分ではない日本人学生のために、いつ、どのような日本語教育を行うかは重要な課題となっている。本学には、新都心キャンパスと小平キャンパスがある。筆者が所属している新都心キャンパスの総合教養科目とコラボレーション科目で、日本人学生のための日本語教育に該当するのは、総合教養科目「文章作法」、総合教養科目・夏期集中授業「役に立つ文章テクニク」、コラボレーション科目「文章作法 基礎の基礎」の3科目であろう。筆者は、すべての科目に、授業担当者もしくは作文の添削補助員としてかかわっている。そこで、本研究ノートでは、3科目を紹介し、本学における日本人学生のための日本語教育のこれからを考える一助にしてもらうことを目的とする。詳しい授業内容や教材、学生の問題点等については、別の機会に論じたい。

前述したように、夏期集中授業は終了した。しかし、「役に立つ文章テクニク」は、15年間にわたって開講されてきた科目なので、記録として残す意味でも触れておきたい。

「日本人学生のための日本語教育」と述べたが、3科目ともに外国人留学生も受講できる。ただ、実際には、外国人留学生の受講者はいないか、多いときでも受講者全体の1割程度のため、本研究ノートでは「日本人学生のための日本語教育」とする。外国人留学生は、外国語科目「日本語」（留学生対象、服装学部・造形学部1～3年次、短期大学部1～2年次）を取ることで、日本語力の向上に努めている。

2. 日本人学生のための日本語教育の必要性

物理学者である木下（1996：12-14）は、原則として英語で書くことになっている物理関係の論文の読者（レフェリー）をしていて、「リーダブルでない論文の表現は、大部分、英語以前に問題があって、英語だけを直そうと試みてもどうにもならず」「日本人には正確に情報を伝達し、理路整然と考えを述べるための訓練—言語技術教育—が必要なことを痛感させられ」、『理科系の作文技術』を著した。リーダブル（readable）とは、「読めばちゃんとわかる」ということである。この本は理科系の研究者や技術者を対象に書かれているため、例文等が理科系のものになっている。そこで、より多くの人々が読みやすいようにという要望に応じて『レポートの組み立て方』が出版された。どちらも初版からかなりの年数が経っているにもかかわらず、現在も広く読まれている。その理由の一つは、明快な文・文章の書き方、事実と意見の区別、表記と、文を書くこと自体から解説している実用的な手引書であるからだろう。

以前は、日本人学生に大学で改めて日本語を教えようという発想はほとんどなかった。日本語が母語であれば書いて当たり前、話せて当たり前という考えのもとに、論文やレポートの構成、引用や参考文献の書き方等の説明をする程度だった。日本語力そのものを磨く授業は少なかった。それが、最近では、日本人学生のための日本語の授業が増えている。大学の教職員は、日本人学生の日本語力に危機感を覚えている。学生は、友人との連絡に、電話よりも電子メールをよく使う。文章を書くことに慣れてるように見えるが、電子メールの文章の文法、語彙、文体は友人向けのものである。どのような場面でも通用する日本語ではない。馬場他（2011：3）は「日

本語も一つの言語である。外国語と異なり生活言語としてかなり自由に扱えることから、学習の必要性を見いだせない学生も多い。日本語も外国語を学ぶように客観的に認識し、学習言語として学ぶ必要があることを、大学生に知らしめることが肝要である」と述べている。

田島（2011）は、日本人学生の文章の問題点を調べている。記されている問題点は境（1998）とほぼ同じである。単純な文法の間違ひがある、表現が適切ではない等の根本的な問題は、年数を経ても、調査対象の学生が異なっても変わっていない。また、田島が指摘するように、体言止めの文が目立つ等、筆者も感じている新たな問題点もある。大学に入学し、日本語で授業を受けなければ、日本語力が自然と高くなっていくことが期待できる。しかし、日本語そのものに集中させる授業も必要である。あらゆる学びは、確かな日本語力の上に成り立つ。

大学で、日本語で学ぶためには、日本語を学び、使いこなせるようになる必要がある。日本人学生のための日本語の授業担当者は、対象学生にあわせて独自にプリントを作ったり、出版されたものを用いたり、試行錯誤をしている。外国人のための日本語の授業内容や教科書が、ある程度、整備されているのに比べ、遅れている感は否めない。日本人学生のための日本語の授業内容や教科書も、今後、整備されていこう。その過程で、画一的、強制的になるのではなく、一人ひとりの学生にあったものを提供できるようになるのが理想である。自分の日本語に不安を感じ、学びなおしたい、力をつけたいと願う学生も多い。それらの学生の要望に応えられる授業でなくてはならない。

3. 新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目における日本人学生のための日本語教育

総合教養科目「文章作法」、総合教養科目・夏期集中授業「役に立つ文章テクニック」、コラボレーション科目「文章作法 基礎の基礎」は開講期間や授業内容がそれぞれ異なるため、学生は自分にあう授業を選んで受講できる。その点では、学生に選択の幅を与えている。

表1に、3科目の概要を示す。「文章作法」と「文章作法 基礎の基礎」は2011年度、「役に立つ文章テクニック」は2010年度の概要である。

3. 1 「文章作法」について

野原明名誉教授が、1997年度に始めた科目である。当時の『授業計画（シラバス） 大学院・家政学部 服装学科・生活造形学科 平成9年度』（51ページ）の授業目的・方針には、次のように書いてある。

現在の社会は、経済界においても学校においても、自分の考えをしっかりと持ち、それを明確に表現できる若者を求めている。しかし、現実には自分の意見を持たない学生が多く、それを文章の形で表現できる人が少ない。

卒業論文を書くにしても、就職試験で小論文を書くにしても、文章の書き方を知らないのではそれに応えることができない。そこで、この講座では文章の書き方を基本から指導し、

表 1. 3 科目の概要

	総合教養科目 「文章作法」		総合教養科目・夏期集中授業 「役に立つ文章テクニック」	コラボレーション科目 「文章作法 基礎の基礎A」 「文章作法 基礎の基礎B」
開講年度	1997 年度～	2005 年度～	1996 年度～ 2010 年度	2004 年度～ (2005 年度は除く)
開講学部	服装学部, 造形学部	短期大学部服装学科・生活造形学科	両キャンパス全学部	両キャンパス全学部
開講学年	3 年	1 年	全学年	全学年
必修・選択	選択	選択	選択	選択
単位	2 単位	2 単位	2 単位	2 単位
開講期間	半期 (前期・後期) 週 1 回	半期 (前期) 週 1 回	8 月下旬～9 月上旬 5 日間集中	9 月 3 日間集中
クラス数 受講者数	各学部 1 クラス 各 30 名まで (受講希望者多数の場合, 無作為に抽選)	両学科合同 1 クラス 20 名まで (受講希望者多数の場合, 無作為に抽選)	1 クラス 人数制限なし	A B 各 1 クラス 各 10 名まで (受講希望者多数の場合, 無作為に抽選)
その他			北海道での集中授業のため, 交通費や宿泊費等がかかる	

大学を卒業したと胸を張って云えるように、文章の書き方を叩き込む授業にしたい。

授業のやり方は、講義だけでなく、頻繁に文章を書かせて添削をし、能力をつけられるよう鍛えていきたい。

自分の考え、言いたいことがなくては、それを形にすることはできない。野原名誉教授は、自分の考えをしっかりと持つためにも、学生に、新聞を読むように助言する。筆者も、毎学期、新聞を読んでいるかを尋ねているが、就職活動目前もしくは就職活動中の3年生であっても読んでいない。

小学校から高等学校にかけて、NIE (Newspaper in Education, 教育に新聞を) という新聞記事を用いた活動を行う学校が増えている。小学校と中学校の教科書でも、新聞記事を扱うようになった。授業では、記事の内容を把握するだけではない。新聞社によって出来事に対する視点が違ったり一面に載せる記事が異なったりすることを確認する、記事の続きを考える、壁新聞を作る、と多彩な授業を展開している。東京都内のある小学校では、5・6年生の児童全員に、新聞(子ども新聞ではない)2紙を毎日、配布している。児童は、週1回、自分が選んだ新聞記事の切り抜きをノートに貼り、その記事の5W1Hや感想等を書いて、校長に直接、提出する。校長は、その全部に目を通し、コメントを記して返す。第19回読売NIEセミナー(2011年2月26日)で校長に会った。校長は「最初は短い言葉しか書けなかった児童が、しっかりとした感想、意見を書くようになる」、「記事を選ぶ、感想や意見を書くという作業を通して、家族との会話も増える」と話していた。

野原名誉教授は、1997年度から1999年度までの3年間、授業を担当した。家政学部服装学科(現、服装学部)と生活造形学科(現、造形学部)の合同授業(1クラス)で、受講者数は50名

までであった。希望者が多い場合は抽選になる。開講期間は通年（1年間）である。

2000年4月に、野原名誉教授は、文化女子大学附属杉並中学校・高等学校（現、文化学園大学杉並中学校・高等学校）の校長に就任した。そこで、2000年度からは、2クラスに増やし、生活造形学科（現、造形学部）は近藤尚子教授が、服装学科（現、服装学部）は筆者が担当している。受講者数は、各クラス30名までとした。開講期間は通年だったが、2010年度より前期・後期の半期単位での開講となり、より多くの学生が受講できるようになった。

短期大学部は、2005年度に授業を始めた。生活造形学科は近藤教授が、服装学科は筆者が担当した。受講者数は両学科とも20名までで、当初から前期のみの半期開講である。入学者数の減少に伴い、2011年度より両学科合同クラスとなり、近藤教授が受け持っている。

筆者が担当している服装学部の「文章作法」について述べる。定員は30名までだが、ほぼ毎学期、抽選になる。2011年度前期は、受講希望者が47名いた。無作為に抽選して31名に受講を許可した。授業内容は表2のとおりである。ここには、各回の授業の主な内容のみを記した。

表2. 服装学部の「文章作法」授業内容（2011年度前期）

回	授業内容	回	授業内容
1	授業についての説明 身の回りの日本語について考える	8	第7回で書いた作文を全員、みんなの前で読む (聞いている学生は、感想を書く)
2	わかりやすい文の書き方について考える①	9	前回の続き 次回の課題の準備
3	3分間スピーチをする（～14回まで） わかりやすい文の書き方について考える②	10	自分の将来について書く 次回の課題の準備
4	わかりやすい文の書き方について考える③ そのものズバリの言葉を使わずに書く①	11	本、漫画、映画等のポップ広告を作る
5	そのものズバリの言葉を使わずに書く②	12	前回の続き
6	わかりやすい文の書き方について考える④ 次回の課題の準備	13	手紙を書く
7	原稿用紙の使い方を復習する 過去の出来事における自分の気持ちを書く	14	第11・12回で作ったポップ広告のコンテスト 日本語の、間違った使い方について考える
		15	授業のまとめ

- ・身の回りの日本語について考える／日本語の、間違った使い方について考える

最近、飲食店で「ご注文は、以上でよろしかったですか」、「コーヒーのほう、お持ちしました」と従業員がよく言う。駅のホームでは「特急券をお持ちでないお客様はご乗車できません」という放送が流れる。このような問題となっている表現、間違っている文法等について一緒に考える。

- ・わかりやすい文の書き方について考える

主語と述語を対応させる、呼応が必要な接続詞や副詞の形を整える等、文の型について、練習問題をしながら解説していく。一文の長さ、段落の作り方も説明する。構成に関しては、作文を書くときに、その都度、指導している。

よく使う漢字の間違いが目立つのでプリントを用いて確認したり、事実と意見の区別をわか

りをつける練習をしたりもする。

・3分間スピーチをする

各回2～3名ずつスピーチをした。一人3分間で、物を見せながら、それについて話す。スピーチにまだ慣れていない段階では、物があつたほうが話しやすい。2011年度前期の学生が持って来た物は、高等学校時代の部活動（新体操）の衣装や手具、誕生日にもらったカード、幼いときから一緒にぬいぐるみ、旅行先で撮った写真、茶道の道具（実演あり）などであった。

はっきりとした発音で、相手にわかりやすい速さで話さなければ、どんなに良い内容であっても理解してもらえない。短い時間ではあるが、その練習にもなる。

・そのものズバリの言葉を使わずに書く

「格好いい」という言葉を使わずに格好いい人や物を、「幸せ」という言葉を使わずに幸せな気持ちや状況を、それぞれ200字で具体的に書く。

作文はすべて、原則として授業中に書く。その場で文法や表記の間違いを指摘したり、内容を一緒に考えたりしたいからである。授業終了時に集め、添削をして感想や意見を書き、次の授業で返す。

次に紹介する「過去の出来事における自分の気持ちを書く」は全員に、そのほかの作文も返却時に2～4人に読んでもらう。ほかの学生の作文を聞くのも、表現や内容を豊かにする助けになるからである。また、3分間スピーチと同じく、はっきりとした発音で、相手にわかりやすい速さで読む練習になるからである。高等学校で長年、国語を担当している教員が「今まで、授業で、日本語の発音練習をしていなかったことが悔やまれる。英語など外国語を教えるときには必ずさせるのに、日本語は母語だから必要ないと思い、させなかった。そのことによって、人前で話すのが苦手な生徒もいるのではないか」と言っていた。この教員が言う発音練習は、もっと基本的なものを指しているが、声を出す機会もなるべく多く設けるようにしている。

・過去の出来事における自分の気持ちを書く

主語は「私」にしない。自分のことを「〇〇さん」「〇〇ちゃん」「彼女」等で表す。そのことによって、自分を冷静に、客観的に見つめることができる。600字で書く。過去の出来事を題材にするのは、体験していることは具体的に文字にすることができるからである。

書いたものは、全員、みんなの前で読む。作文を書く前に、そのことは説明してある。

聞いている学生は、B7くらいの大きさの紙に、読み手一人につき1枚、感想を書く。書くときの条件は、作文の内容や表現、声の大きさなど「良いところ」について書く、ということである。書いたものは、筆者が集めて目を通した後、読んだ本人に渡している。受講者が30名いる場合、一人の学生が29名分、感想を書くことになるが、自分も29名から感想をもらえる。聞いている学生が感想を書いている間、筆者は発表した学生と、今回の発表のしかた等について話し合う。

・自分の将来について書く

この作文は、遊びの要素も入っている。半期の授業の息抜きである。自分の将来について600字で書く。現実的な話でもいいし、夢物語でもいい。この作文も主語は「私」にしないが、語り手を想定する。例えば、「就職したいと思っている会社で、10年後にデザイナーとして活躍している自分を、憧れの目で見ている後輩が語っている」、「服を作るのが得意なおばあちゃんである自分を、孫娘が自慢している」などだ。夢物語としては、有名なネコ型ロボットが「実は、僕を造ってくれたのは○○ちゃんです」と話しているものもあった。

・ポップ広告を作る

ポップ広告作成は、今回、初めて行った。作成の条件は、出来上がり寸法はA4の大きさにするということだけである。作文は手書きだが、ポップ広告はコンピュータを使ってもよいことにした。学生の作品は、コンピュータのソフトウェアを使って仕上げたものもあったが、大半は手書きの文章に絵を描いたり写真を切って貼ったりしたものだった。色彩も豊かな見事な作品ばかりで、書店に置きたかった。楽しく作成できたという声が多く、学生の得意分野を生かすことができた。

・手紙を書く

手紙を書く機会が少なくなっているため、手紙の書き方も紹介している。便箋と封筒を用いて、目上の人に、入学や卒業、誕生日、就職、結婚のお祝いをもたらしたお礼の手紙を書く。手紙を書く相手は、架空の人物ではなく、実在の親戚や知り合いにする。目上の人へなので、少しではあるが敬語を使う練習にもなる。

この授業は、レポートや卒業論文を意識したものではない。そのことは、シラバスにも明記している。しかし、明快な文、わかりやすい文が書けるとい文章を書くときの基本が身につけば、様々な文章、場面に対応できる。また、文章を書くことが楽しくなる、少なくとも苦ではなくなるということも大切である。

3. 2「役に立つ文章テクニク」について

夏期集中授業は、夏の長期休暇を利用して、集中的に総合教養科目の単位取得を目指すものである。両キャンパスの全学部全学年を対象に、北海道で、第1回(1988年度)から第23回(2010年度)まで、23年間にわたって実施された。授業に加えて、北海道の自然や文化に触れる研修旅行もある。受講料は無料で、往復の飛行機や研修旅行、宿泊、食事等は実費を徴収する。受講者数の制限はない。

第1回(1988年度)から第8回(1995年度)までは、文化女子大学室蘭短期大学(2009年3月閉校)のキャンパスで行った。初回である1988年度の4月に学生に配布された『昭和63年度文化女子大学室蘭短期大学夏期集中授業開設のお知らせ』には、

文化女子大学では、二年間あるいは四年間をより充実させるため、一般教育科目の履修に新しい方法を導入しました。……この方法の特徴は、新宿・小平両キャンパスを離れ、文化

女子大学室蘭短期大学のキャンパスを利用するところにあります。

集中取得と室蘭実施での教育上の効果は、単位取得後の学業生活で、専門科目の勉学により多くの時間をあて得ること、教科目のみに集中させるため学業効果が大きいこと、また、研修寮（某大手企業のもの－個室）での合宿生活であるための人間関係の深まり、転地に依る刺激などが考えられます。（以下、省略）

とある。授業は、室蘭短期大学の教員が担当した。6科目が開講され、その中から8単位分まで履修可能だった。Aコース（9月6日～13日）、Bコース（9月14日～22日）、A・Bコース（9月6日～22日）の3コースが用意された。

受講者数の増加もあり、第9回（1996年度）から第20回（2007年度）まではニセコ東山プリンスホテル、第21回（2008年度）から第23回（2010年度）まではキロロリゾートホテルピアノで行った。1996年度に場所が室蘭短期大学からホテルに移ったのを機に、授業を担当する教員も新都心キャンパスと小平キャンパスの教員が中心となった。開講科目も大幅に変わり、「役に立つ文章テクニク」も、この年度から始まった。

「役に立つ文章テクニク」は、野原名誉教授と近藤教授が授業を担当し、第9回（1996年度）から第23回（2010年度）まで毎年、開講された。長年、開講されている科目はほかにもあるが、担当教員が変わらなかった唯一の科目である。筆者も、全15回、作文の添削補助員として参加した。第9回（1996年度）と第10回（1997年度）は必修科目だったため、受講者が、第9回は424名、第10回は308名と多かった。第11回（1998年度）からは選択科目となり、各回、平均70名の学生が受講した。

夏期集中授業で開講される科目数は少ない。学生は、その少ない科目の中から、自分が受ける科目を選ぶ。例えば、第22回（2009年度）と第23回（2010年度）は、Aコース・Bコースに分かれず、5日間のコース一つだけだった。科目は、必修の「北海道の文化と生活」と、選択の「役に立つ文章テクニク」・「役に立つ心理学」の3科目である。学生は、「北海道の文化と生活」と「役に立つ文章テクニク」もしくは「北海道の文化と生活」と「役に立つ心理学」の、どちらかの組み合わせを選ばなければいけない。「北海道の文化と生活」だけでいい、「役に立つ文章テクニク」と「役に立つ心理学」の組み合わせがいい、という選択肢はない。また、卒業年次の学生で、卒業に必要な総合教養科目の単位が足りないの、どのような科目かは関係なく、単位が取得できればいいと参加している学生もいる。

3.1の「文章作法」と3.3の「文章作法 基礎の基礎」は、その科目だけを単独で受けることができる。数多くの科目から、この科目にしよう決めて受けるわけである。そのため、授業中は常に、学生の、学びたいという強い気持ちを感じる。一方、「役に立つ文章テクニク」は、学びたいという気持ちが見られる学生がほとんどではあったが、科目の組み合わせとして仕方がなく、単位がほしいから仕方がなく受けているのではないかという学生もいた。後者の学生にとっては、泊まり込みで、一日中、空き時間がない時間割で行う夏期集中授業の「書く授業」は苦痛だっただろう。しかし、仕方がなくではあっても、書かなくては単位取得ができないので、

課題はこなしていた。そこから何かを得てくれていればと願っている。

2010年度の授業内容を、簡単に紹介する。何かを表現する場合、その表現方法は多岐にわたることを確認したうえで、その中の一つである文章による表現に取り組んだ。学生は、書く準備段階での心構えや書く際の構成、表現についての講義を聴くだけでなく、頻繁に文を書く。聴いたことを書くことによって実践し、確かめていく。この繰り返りで、自然と書く力が身につく。文の長さは、一文（40～50字程度）から100字、200字、400字、600～800字と長くしていった。100字の文章では、まず自分の特徴を表す言葉を10考えて、その中の二つについてそれぞれ100字で具体的に書いた。200字の文章では、かわいいもの、美しいものについて、それぞれ200字で詳しく述べた。400字の作文の題は「キロロでの出来事」、600～800字の作文の題は「エコロジー」であった。キロロとは、宿泊先のことである。このほかに、自分の服装（髪形から靴まで）を文字で詳しく表したりもした。

授業の最後を書く600～800字の作文は、評価にかかわる比率が高いため、例年、学生に返却はしていない。これ以外の学生が書いたものは、一文単位のものであっても、その都度、添削して学生に返した。そのときに心掛けたことは、なるべく早く学生に返すということである。そうしないと、学生は、自分が間違ったところを確認してから次の文章を書くことができず、ただ字数をこなしているだけで進歩はない。そこで、その日の授業がすべて終わった後で添削をして、翌朝、返却するだけでなく、例えば、1・2時限目「役に立つ文章テクニック」、3・4時限目「北海道の文化と生活」、5時限目からは再び「役に立つ文章テクニック」という時間割の場合、1・2時限目で書いたものを3・4時限目に添削して、5時限目に返却した。

夏期集中授業は学習環境も大きく変わるため、時には体調を崩す学生もいて心配した。しかし、豊かな自然の中で、共同生活を送りながら勉学に励むというのも、貴重な体験になったことだろう。

3. 3 「文章作法 基礎の基礎」について

コラボレーション科目は、2004年度に始まった。『大学案内 2012』（138ページ）には、次のように説明してある。

「学部・学科をこえた学生同士」「専門の異なる教員同士」「大学と産業界・大学と地域・大学と国内外の大学」などのコラボレーションを意図して開講される科目です。通常授業では不可能な実践的な授業、あるいは集中授業とすることによって効果的に教育できる授業を、9月中旬と2月中旬に集中的に行います。

「文章作法 基礎の基礎」は、2004年度から毎年（2005年度は除く）、9月に3日間行っている。2011年度は9月15日～17日に授業をした。AクラスとBクラスに分かれており、Aクラスは加藤薫准教授が、Bクラスは筆者が担当している。Aクラスは自己紹介文とミニレポートを、Bクラスは手紙と祝辞を書く。学生は、どちらのクラスにするかを決めて、登録する。個別指導に

重点を置いているため、受講者数は各クラス 10 名までとした。2011 年度は A クラスは 14 名、B クラスは 13 名の申し込みがあり、全員に受講を認めた。

授業は、A B 合同クラスで行うものもある。表 3 に、今年度の授業内容を記した。合同クラスと、筆者が担当している B クラスの授業について説明する。

表 3. 「文章作法 基礎の基礎」授業内容 (2011 年度)

	1 時限目	2 時限目	3 時限目	4 時限目	5 時限目
9 月 15 日 (木)	A B 合同： わかりやすい文の 書き方について考 える①	A B 合同： わかりやすい文の 書き方について考 える②	A B 合同： 特別講義の予習を する	A B 合同： 特別講義①	A：自己紹介文を 書く B：手紙を書く
9 月 16 日 (金)	*前日の続き A：自己紹介文を 書く B：手紙を書く	A B 合同： 特別講義②	A：ミニレポートを作成する B：祝辞を書く		
9 月 17 日 (土)	*前日の続き A：ミニレポートを作成する B：祝辞を書く				

・わかりやすい文の書き方について考える

加藤准教授と筆者で 1 コマずつ担当している。内容は、「文章作法」(服装学部)の「わかりやすい文の書き方について考える」とほぼ同じである。

B クラスでは、このほかに、祝辞を書く前にもわかりやすい文を書くための練習問題をした。その中に、「来れる」を正しい形に訂正するものがあった。「来られる」と訂正できたのは一人だけだった。この学生は、休み時間にいつも文庫本を読んでいた。また、祝辞の原稿に石川啄木の詩を引用していた。ほかの学生は、「来れる」に違和感がなく、どうして訂正を求められているのか理解できなかった。文化庁は、「平成 22 年度『国語に関する世論調査』」(2011 年 2 月に全国 16 歳以上の男女に調査実施、9 月 15 日に調査結果発表)で、ら抜き言葉を使うかについても調べている。「来られる」ではなく「来れる」を使うと答えた人は、16～19 歳では 73.8%、20 歳代では 54.0%であった。

・特別講義

新聞社や出版社から頼まれて記事や書評を書いている教授に、特別講義をしてもらっている。2006 年度は、高橋和夫名誉教授に「私が文章を書くときに心がけていること」「哲学の立場から『対話』について考える」という題でお願いした。2008 年度からは、テレビ局の記者であった高橋茂男教授に「記者は文章をどう書くか－書くためのヒント－」という題でお願いしている。両教授とも、自分が書いた記事や書評を用いて、書くときの心構えや留意点について講義をしている。特別講義の前には、授業の予習(記事や書評を読み、教授から与えられた質問を考える)の時間を設けている。この時間は、加藤准教授か筆者が担当している。

・手紙を書く

内容は、「文章作法」(服装学部)の「手紙を書く」と同じである。しかし、「文章作法」の 2

倍の時間を使えるため、様々な手紙文の紹介もしている。

・祝辞を書く

お祝いの席で祝辞を述べると仮定して、祝辞の原稿を書く。スピーチは3分間くらいが適当なので、800字を目安にしている。

授業は、友人の結婚式に招待されて祝辞を述べるという設定で、友人から結婚式の招待状が届いたところから始める。結婚式の招待状を見せ、返信はがきの書き方を確認する。次に、祝儀袋や袱紗の紹介をする。お祝いの金額は奇数か偶数か、新札が手元にはないときはどうするかということも一緒に考える。その後、祝辞の構成や使ってはいけない言葉について説明する。

実際に書く祝辞の設定は、友人の結婚式、祖父母の長寿の祝い、両親の結婚記念日など、学生が自由に決める。ただし、相手は実在の、よく知っている人物に限る。誰にでも当てはまる内容の祝辞を書くのではないからだ。特定の人のためだけの祝辞にするには、実際に見たり聞いたり体験したりしたことを、より具体的に書かなくてはいけない。

今年度は、全員が、友人の結婚式で祝辞を述べるという設定だった。これまでには、祖父母の喜寿のお祝いで孫代表として挨拶をする、両親の結婚30周年のお祝いを子供たちで企画してお祝いと感謝の言葉を述べる、高等学校時代の恩師の定年祝いの会で教え子代表として挨拶をする等もあった。

祝辞を書き始めたら、完成まで個人作業になる。筆者と相談しながら、書き進めていく。書き終わったら、一人ずつ発表する。聞いている学生は全員、発表後に、口頭で感想を述べる。

加藤准教授も筆者も、この授業では個別指導に重点を置いている。『授業計画（シラバス） コラボレーション科目 2011』（19ページ）でも、授業の方針・到達目標として「弱点は人それぞれ違うので、個別指導に重点を置く」「授業担当者と一緒に構成や内容、表現について考え、完成させる」と述べている。そのため、受講者数も各クラス10名までにしている。

受講者数も少なく、集中授業であるため時間も継続して使えるので、学生一人ひとりとじっくり話しながら祝辞の原稿を完成させていくことができる。筆者は、学生が書いた原稿の文法の間違いやわかりにくい表現の箇所は示すが、正しい文法やよりよい表現を口頭で教えたり原稿に赤字で書いたりはしない。学生が自分で正しく訂正する、わかりやすく具体的な表現にするまで問いかけを繰り返す。

例えば、友人は優しいということを示す出来事として、「私が高等学校受験の時、お守りを貸してくれました。」と書いていた学生とは、次のような会話をした。□は筆者、■は学生である。□「お守りを貸してくれたんですか」、■「彼女は、もう合格してたから」、□「どこに」、■「入りたかった高校」、□「お守りと彼女の合格は関係がありますか」。問いかけを繰り返した結果、その学生は「私が高等学校を受験する時、○○さんは、もう入りたかった高等学校に合格していました。そして、受験する時に持っていたお守りを、『大丈夫、絶対合格するよ』と言って貸してくれました。」と書き直した。

学生が自分で気づくこと、考えることが大切である。これは、勉強全般に共通している。『授

業計画（シラバス）には「授業担当者と一緒に考える」となっているが、実は、考えているのは学生で、筆者はその手助けをしているにすぎない。学生には、書いては直すことを繰り返す根気が求められるが、完成したときは達成感を味わえるだろう。

4. おわりに

紹介した3科目ともに、文章を書くことが大きな柱となる。受講者は、筆者らの説明を聴くだけではない。文章を書くために材料を集め、構成を考え、辞書を引きながら書き進めていく。「文章作法」はほぼ毎週、ほかの2科目も短期集中で休みなく書き続ける。机に向かったの作業なので、頭はもちろん体も疲れる。それでも、学生はひたすら書く。集中授業のときは、休み時間でも書いている学生がいる。また、筆者が指摘したり問いかけたりしたことについて、考えて、文法を訂正したり表現を深めていったりする。一度ではうまくいかない場合もある。そのときは、問いかけと修正の繰り返しになるが、学生は嫌がらない。途中で投げ出さない。

学生から感じるのは「やる気」である。わかりやすい文・文章が書けるようになりたい、日本語力をつけたいという強い気持ちである。筆者が、その気持ちに応える授業をしているかどうかは心もとないが、やる気がある学生との授業は楽しい。本学の多くの学生は、もともと「やる気」がある。「根気がある」「修正を繰り返しながら完成させていく過程を厭わない」も、専門教育科目で培われている。日本語力をつけよう、磨こうという地道な作業に向いている。

ただし、学生の日本語力は差がある。わかりやすい文について一緒に考えていたときに、「述語って何ですか」「呼応って何のことですか」と聞かれたことがある。筆者は、大学生ならこれらの言葉の意味することは当然わかっているものとして授業を進めていた。これは、本人の勉強不足だけではすまない面もある。教員は、母語だからわかっているはずだ、すでに学んでいるはずだと思込む。学生も、述語や呼応の意味がわからなくとも日本語で書いたり話したりできるし、日常生活で不自由はしないため、意味がわからないということ自体がわからないまま年月を過ごす。そして、ある日、双方が、日本語の土台の一部が欠けていることに気がつく。

土台は直方体の形をしていると考えてみよう。形も整っていて大きく、内部にも隙間がない状態ならば、次から次へと上に積み重ねていくことができる。直方体の高さが変わるだけで、崩れることはない。土台の直方体がいびつな形だったり、小さかったり、大きくても内部に隙間があったりすると、安定感がなく、積み重ねが容易ではない。大学入学までに土台が完成しており、在学中は積み重ねていくこと、高くしていくことに専念できるのが理想であるが、現実が違う。土台づくりに励まなければいけない学生、土台の穴埋め作業をしなければいけない学生、土台はしっかりしているので高くしていくことに専念できる学生など様々であり、細分化していけば切りがない。しかし、大きくて隙間のない土台ができていれば、自力で高くすることも可能だ。学生のやる気に応えるためにも、少なくとも、土台が整った状態で社会に送り出したい。

現在、多くの大学に、初年次から、日本語の土台をしっかりとさせ、語彙力、表現力、文章力などをつけようという授業がある。独立した科目として行っている場合もあれば、レポートの書き方、プレゼンテーションのしかたを学ぶ授業の中で行っている場合もある。いずれにせよ、初

年次だけで終わってしまえば意味がない。学年をこえて、継続して行うことが望ましい。これは、本学においても同じである。

様々な学生に対応しながら継続して行うには、全学的な取り組みが不可欠である。本学の日本人学生にあった、本学独自の入学から卒業まで一貫したカリキュラムを考えるべきである。学部・学科、コースで、必要とする日本語の技能やその程度は異なるものもある。それも含めて、在学中の4年間（短期大学部は2年間）の最終目標と学年ごとの目標、授業内容と開講学年などを広い視野で検討し、日本語力をつけるために進んでいく道を示す。学生は、途中でその道からそれることなくまっすぐに進み、野原名誉教授が「文章作法」を開講するときに述べていた「大学を卒業したと胸を張って云える」日本語力を身につけてほしい。

参考文献

木下是雄（1981）『理科系の作文技術』中央公論社

———（1990）『レポートの組み立て方』筑摩書房

———（1996）「言語技術教育に取り組む」『日本人の言語環境を考える 木下是雄集3』晶文社 pp.11-42

工藤俊郎・長尾佳代子（2010）「1年次前期の作文指導の効果（一般教養科目「文学」課題レポートに現れた向上）」『リメディアル教育研究』第5巻第2号 2010 日本リメディアル教育学会 pp.73-80

境希里子（1998）「日本人学生の、文章力における問題点（1）——文単位でのわかりやすさについて考える——」『文化女子大学紀要 人文・社会科学研究』第6集 pp.201-210

佐渡島紗織（2009）「早稲田大学における学術的文章作成授業—2年目における成果と課題—」『初年次教育学会誌』2009 第2巻第1号 pp.72-79

杉並区立方南小学校ホームページ 学校長のページ「新学習指導要領実施年度にあたって」校長 末吉雄二
http://www.suginami-school.ed.jp/hounanshou/01_koutyou/01_koutyou.html（閲覧日：2011年9月14日）

田島ますみ（2011）「日本人大学生が書いた文章に見られる問題点（分類と整理）」『日本リメディアル教育学会 第7回全国大会発表予稿集』pp.203-204

馬場真知子・たなかよしこ・小野博（2011）「日本人大学生の日本語力の養成について」『リメディアル教育研究』第6巻第1号 2011 日本リメディアル教育学会 pp.3-5

文化庁ホームページ 報道発表「平成22年度『国語に関する世論調査』について」

http://www.bunka.go.jp/ima/press_release/pdf/h22_yoronchosa.pdf（閲覧日：2011年9月25日）

文化学園大学・文化学園大学短期大学部

『授業計画（シラバス） コラボレーション科目 2011』 p.19

『大学案内 2012』 p.138

文化女子大学・文化女子大学短期大学部

『授業計画（シラバス） 大学院・家政学部 服装学科・生活造形学科 平成9年度』 p.51

『昭和63年度 文化女子大学室蘭短期大学夏期集中授業開設のお知らせ』